

I 学校の概要

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現推進モデル校事業

綾川町立綾川中学校

◆生徒数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全 校
5学級 155名	5学級 165名	6学級 193名	3学級 14名	16学級 527名

○教員数 45名

◆学校の特徴

本校は、令和4年度に旧綾上中学校・旧綾南中学校の統合を経て開校した新たな学校である。統合3年目を迎えた今年度は、学校教育目標「思いやりと広い心で ともに生きることを学ぶ 知性と創造性を磨き 世界に生きることを学ぶ」のもと、学校スローガン『ともに チャレンジ! ～ 美しい「あ・や・が・わ」の進化 ～』を掲げ、「一人」を大切に全員参加の教育活動を目指して日々の指導を展開している。

本校の生徒は、恵まれた自然環境と家庭や地域の方々に温かく見守られながら育っており、素直で純朴である。授業や学校行事、清掃活動等に一生懸命取り組むことができる反面、主体性や粘り強さにはやや物足りなさを感じる。しかし、他者との協働をいとわない生徒集団であるという強みを生かすために、一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じた「指導の個別化」や、一人一人の学習スタイルや興味・関心等に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する「学習の個性化」を図ったりして「個」にもフォーカスしつつ、協働的な学びとの一体的な充実に向けて研究推進に取り組んでいるところである。

II 研究主題等

研究主題

ともに楽しむ授業づくり
～ 分かる、できる、全員参加の楽しい授業を目指して ～

◆研究主題設定の理由

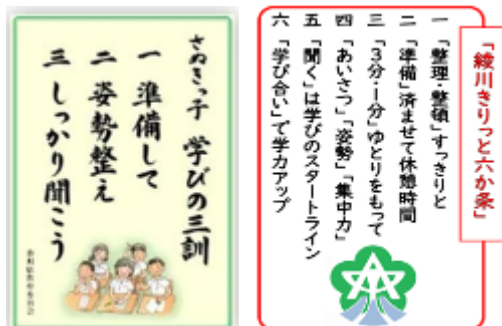
本校の生徒の課題は、学力と学習意欲の二極化（多極化）である。特に、学習意欲の二極化（多極化）は顕著であり、昨年度実施したアンケート調査における「学習している内容に興味をもって取り組んでいますか」という問いに対し、「そう思う」と自信をもって回答した生徒の割合は半数にも満たない。こうした状況を改善するには、どの生徒も授業の中で、「分かった」「できた」と実感できる場面が随所にあること、どの生徒も学ぶことの楽しさを実感できること、どの生徒も授業の中で自分の居場所や活躍している実感がもてることなどが大切であると考えた。

そこで、授業改善を推進していくためのキーワードとして、「分かる」「できる」「楽しい」「全員参加」を掲げるとともに、教師と生徒が一緒になり、ともに授業をつくっていくことが重要であると考え、本研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

① 『綾川きりっと6か条』を基盤とした指導の展開

学習規律及び行動規範として整えた『綾川きりっと6か条』【図1】を、学びに向かう構えを醸成する基礎・基本となるものとして共通理解し、意味理解と価値認識の浸透に努めながら、生徒への学校生活全般での汎用を意図した指導を展開する。『綾川きりっと6か条』は、各教室前方に掲示し意識付けるとともに、本校の学校文化として確固たるものになるよう、生徒会活動ともタイアップ【写真1】しながら、学校全体での取組を行っている。



【図1】学びの構えをつくる教室掲示



【写真1】学習規律定着度調べ後に成果と課題について話し合う学習委員

② 学習指導過程の工夫

「ア 解決する必然性のある学習課題の設定」→「イ 生徒が自分で「選択・判断」する場面の位置付け」（重点取組事項）→「ウ 目的意識のある学び合い」→「エ 成長を実感する振り返り」による学習過程を意図的に仕掛け、より深い学びへと導く効果的な指導方法や手立てを工夫する。

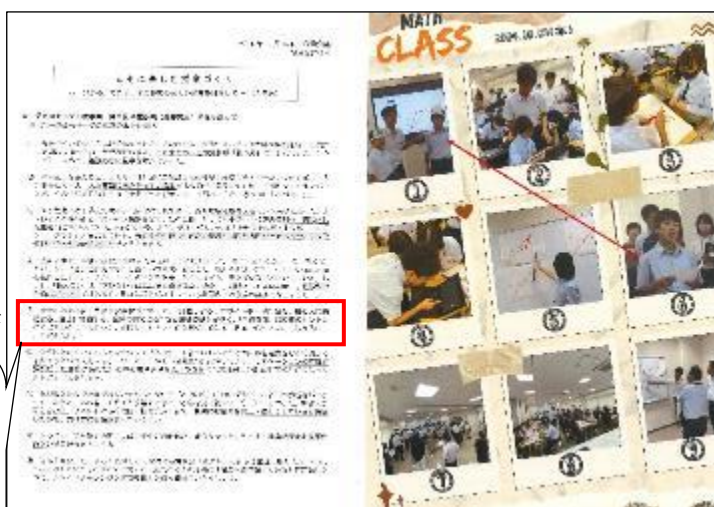
【図2】学習指導の流れのイメージ



③ 教職員研修の充実

- 指導スキル向上を目指したミニ研修
- ICT 研修
(メディア担当・ICT サポーター)
- 外部講師による講話・演習
- 研究授業・授業参観（初任研、1 経、中堅Ⅱ、本事業における公開授業 3 本など）
- 授業討議を踏まえた成果と課題のまとめプリント【写真2】を活用した研修

生徒の活動場面が豊富な授業構成であった。“指差しする、ホワイトボードに貼る、隣の人に説明する、自由に移動して説明する、全体の前で語る”など生徒の動きが多く、「全員参加」の授業のヒントとなる場面がたくさんあった。教師のしゃべりすぎを防ぐためにも、日頃から皆さんにも取り入れていただきたい。



【写真2】公開授業（2年数学）における成果と課題のまとめプリント

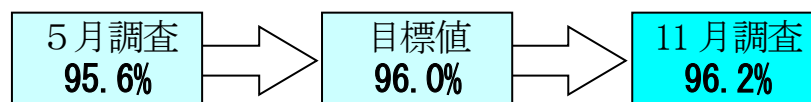
Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (研究成果の参考とする10の指標 生徒アンケート)

普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



2 (綾川中学校独自 学習アンケート)

ペアやグループで話し合ったり、練習したりするのは楽しく効果的だと思う。

指標 「①当てはまる+②どちらかといえば当てはまる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 公開授業の参観及び授業討議

3本の公開授業(6月-3年国語、9月-1年英語、10月-2年数学)を全教職員で参観し、授業討議の場を設けた。

まず、6月10日(月)の公開授業(3年国語)では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のイメージを全教職員で共有した。その際、生徒が「選択・判断」する場面を位置付けた学習指導過程の流れ、学び合う場(ペア・グループ・全体)の設定、一人一台端末の活用例等、どの教科の実践にも取り入れられそうな具体を提案した。その後、本公開授業における学びを日々の実践に取り入れたり生かしたりした教職員も多く、アンケート結果の肯定的な回答がごくわずかではあるが増えた要因と考える。



【学習内容をペアで確認】



【分析対象との出会い】



【「選択・判断」の場面の妥当性・有用性についての授業討議】

(2) 外部講師を招聘しての講話・演習

【8月23日(金) 講師：香川大学教育学部 准教授 神野 幸隆 先生】

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の研究先進校における実践事例の紹介、自由進度学習の考え方や单元内への位置付け等について講話いただいた。

また、授業者の「観」のアップデートという視点から、今後の授業づくりに向き合う姿勢や方向性等についてご示唆いただき、日々の教育活動を見直す貴重な機会となった。

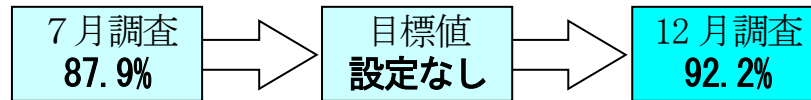


【生徒に委ねる学習活動について協議】

3 (綾川中学校独自 学習アンケート)

学習している内容に興味をもって取り組んでいる。

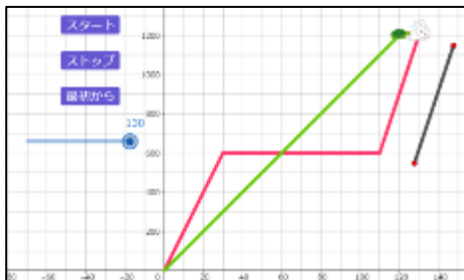
指標 「①当てはまる+②どちらかといえば当てはまる」の合計



10月3日(水)の公開授業(2年数学)では、本校の生徒の大きな課題の一つである「学習意欲の二極化(多極化)」の改善に向けて、以下のような場面を位置付けながら、授業提案を行った。

(1) 問題場面の把握と学習課題の設定、課題解決の見通し

ア 動くグラフの提示



イ 生徒による問題場面の実演



生徒にとって身近な題材であることに加え、上記アとイの仕掛けがあったことで本時の学習に対する抵抗感が軽減するとともに、問題場面のイメージを全員にもたせることに成功した。そして、スムーズかつ自然な流れで、次のような学習課題を導き出すとともに、(2)のような課題解決の見通しをもたせやすくすることにもつながった。

【学習課題】

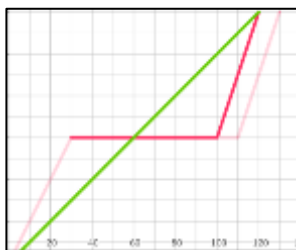
うさぎとかめが同時にゴールするためには、どの条件を変え、グラフがどのような形になればよいか？

(2) 生徒が「選択・判断」する場面の設定

変更する条件がいくつもある中、思考が拡散しすぎないように以下の①～③の3つに選択肢を絞り、その中から、個々の解決しようとする視点に応じて「選択・判断」させ、課題解決に向かえるようにした。

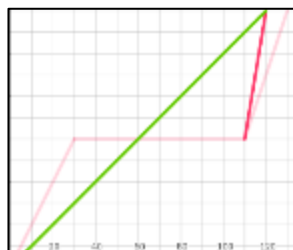
【選択肢①】

うさぎの休憩時間の長さ



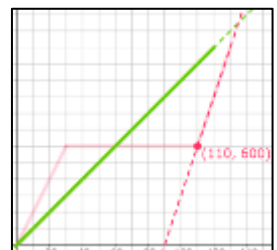
【選択肢②】

休憩後のうさぎの速さ



【選択肢③】

コースの距離



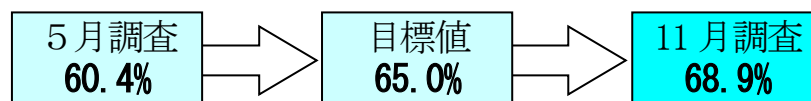
学びの選択肢が複数あることで、生徒は安心感を抱き、個の興味・関心や自分の視点に応じた方法で学習を進められていた。さらに、個の「選択・判断」が異なることで考え方に差異が生じ、「どうやって考えたのか」「なぜそのように考えたのか」などを「聞きたい」という好奇心を刺激することができた。そのような過程で、対話する必然性が生まれ、協働的な学びの活性化にもつながった。

(1)(2)のような取組を、各教科の特性に応じて仕掛け授業実践を重ねたことが、肯定的な回答の増加につながったと考え、本校の大きな課題である学習意欲の二極化(多極化)に改善の兆しがあると捉えている。

4 (研究成果の参考とする10の指標 生徒アンケート)

授業で、PC、タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。

指標 「①ほぼ毎日+②週3回以上」の合計



本研究の推進にあたり、ICT（一人一台端末）の活用は欠かせないものである。そこで、メディア教育担当と連携しながら、ICT研修を企画したり、授業での活用方法・場面等を提案したりする機会を設け、教職員と生徒の使用頻度の増加・活用スキルの向上を目指した。

実践1 ICT研修（教職員）

ICTサポーターにご尽力いただき、本町に導入されている教育支援アプリを活用した授業での実践例を複数ご紹介いただいた。実際に演習を行いながら研修を進めることで、教職員自身がICTを活用するよさを強く実感し、日々の授業実践に生かそうとする意欲を喚起できた。



【ICTサポーターによる研修】

実践2 学級活動・総合的な学習の時間におけるICT（教育支援アプリ）の活用事例（生徒）

【2年生（総合）】

【職場体験学習報告書作成】



【職場体験学習報告会】



【3年生（学活）】

【背面掲示（ポートフォリオ）作成】

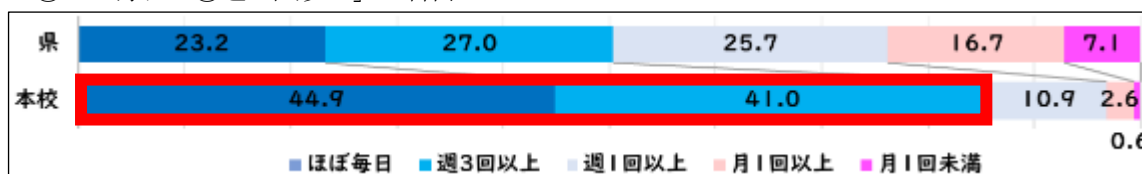


各教科のみならず、学活や総合の時間にも一人一台端末を使用する機会を積極的に設け、それぞれの場面に応じてツールやアプリ等を選択し活用することを通して、スキルが十分に身に付いてきたことがうかがえる。

5 (香川県学習状況調査 生徒質問紙)

普段の授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用していますか。

指標 「①ほぼ毎日+②週3回以上」の合計

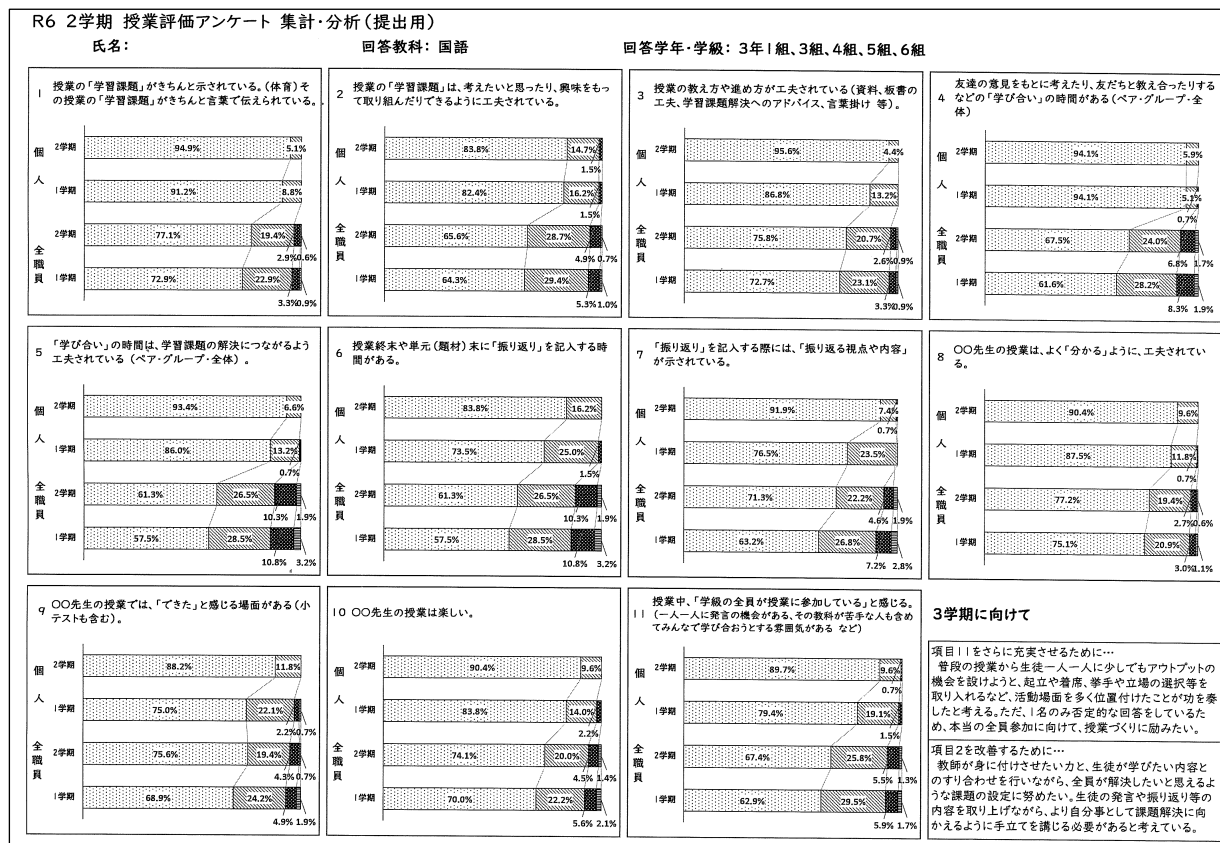


以上のような取組を重ねてきたことにより、アンケート4からは肯定的な回答が「8.5ポイント増加」、アンケート5からは県を「35.7ポイント」も上回る結果が得られている。また、単に一人一台端末を使用するだけでなく、個の実態や学びの対象に応じて選択・活用している様子も見えて取れることから、大きな成果を上げていると認識している。

◆特徴的な取組

① 授業評価アンケートについて

本校では、従前より全教員が「生徒による授業評価アンケート」を、担当する全学級対象に行っている。それぞれが自分の授業に対する生徒の受け止め方と向き合いながら、教員個々が状況に応じて改善に向けた手立てを整理し、次学期に向けた重点的な取組を進められるようにしている【図3】。今年度も年に2回（7月と12月に）同様のアンケートを行った。教師の仕掛けが適切であったかを検証し、更なる個々の授業スキルの向上に努めるとともに、次年度の研究構想に生かしたいと考えている。



【図3】授業評価アンケートを受けての分析例

② 研究先進校等の視察（県外）

研究推進の一環として、広島県では公立中学校2校の研究視察を行い、京都府では附属中学校の研究発表会に参加してきた。そこでの学びや気づき等をスライドにまとめ、報告会を実施するとともに、その内容を全教員で共有し、次年度の研究推進に生かそうとしている。

広島県

・広島市立牛田中学校
・世羅町立世羅中学校

京都府

・京都教育大学附属桃山中学校



【それぞれの公開授業の風景】

IV 研究の成果と課題

◆成果

効果的な「選択・判断」の場面設定

公開授業の中で、以下のA～Eのような生徒の実態が見て取れた。

- A メリットやデメリットを踏まえながら、思考ツールを適切に選択（3年国語）
- B 自身の言葉で「選択・判断」の意図を表出（3年国語）
- C スピーチ原稿を改善する際に用いる道具（表現シート・教科書・タブレット・和英辞書等）を個々の課題に合わせてスムーズに選択（2年英語）
- D 難易度別の選択肢により、取り掛かりやすい方法から着手（2年数学）
- E 難易度別の選択肢により、別の方法も試してみたいという挑戦意欲の高まり（2年数学）

以上のA～Eのように、生徒の「なんだか分かりそうだ」「少し頑張ればできそうだ」という思いを喚起するとともに、全員が意見や考えをもつことにつながり「全員参加の授業」をも可能にした。したがって、3本の公開授業において位置付けた「選択・判断」の場面が効果的であったと捉えている。

「協働的な学び」につながる「差異」の表出

3年国語では、「ア 分析の仕方」、「イ 最も優れているポスター」、「ウ 重視した観点」等の複数の「差異」を、2年数学では、選択肢①～③（4ページ目に記載）による解法の「差異」を生み出すことに成功した。そのことにより、「自分の考えと違うところを聞きたい」という好奇心を刺激し、協働的な学びの活性化にもつながった。また、個人で整理・分析したり、解決に励んだりする時間を十分に確保したことにより、その後は堰を切ったように話合いや解法の説明がスタートし、決められた時間を過ぎても活発な議論が繰り広げられるなど、主体的に授業に臨んでいる様子が見て取れた。

◆課題

学び合いの成果を個の「選択・判断」に生かす

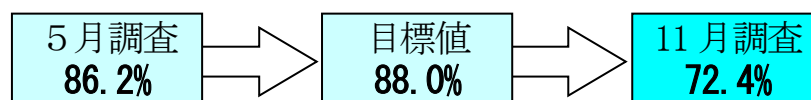
前述の取組より、複数の差異が生じることで「聞きたい」という好奇心を刺激することができ、対話する必然性が生まれることで、協働的な学びの活性化につながるという部分までは検証できた。しかし、協働的な学びを受け、個の「選択・判断」を修正したり、再構築したりする、というところまでは至っておらず、課題が残った。協働的な学びを通して他者から受けた影響により、自身の考えが広がったり、深まったりした先に、本当の「楽しさ」が待ち受けていると捉え、今後はその部分にアプローチする手立てや仕掛け等の工夫を講じながら、授業づくりに努める必要があると考えている。

教職員の授業改善

以下の教職員を対象としたアンケートの結果より、第2回目の調査（11月）において、13.8ポイントもの肯定的な回答の減少が見て取れる。

（研究成果の参考とする10の指標 教職員アンケート）
普段の授業で、児童生徒の学び合う場を取り入れていますか。

指標 「①思う+②どちらかといえばそう思う」の合計



否定的な回答が増加した原因を探るべく、数名に聞き取りをしてみたところ、「各種試験の範囲をこなすことに追われる」、「学校行事に向けた練習等との兼ね合いにより、学習活動の中に学び合いの時間を設けることが難しい」などという中学校ならではの声が多数上がった。これらを改善するためには、授業の見直しや学習活動の精選を図り、学び合いに使える時間を捻出できるように努める必要があると考える。今後は、引き続き講義型の授業からの脱却を図ったり、一つ一つの学習活動が本当に効果的かどうかを見直したりできるよう、授業スキルの向上に向けた研修や演習等を計画していきたい。